

Title	イギリス・ケンブリッジ州における精神障がい者支援に関する経年的研究 (3) : リカバリー・イノベーションとピアサポートワーカーの役割
Author(s)	助川, 征雄
Citation	聖学院大学論叢, 第 25 卷(第 2 号), 2013. 3 : 73-90
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4404
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

イギリス・ケンブリッジ州における精神障がい者支援に関する経年的研究(3)

リカバリー・イノベーションとピアサポートワーカーの役割

助 川 征 雄

抄 録

本論は、本誌第24巻第2号掲載の「イギリス・ケンブリッジ州における精神障がい者支援に関する経年的研究(2)」に続く研究論文である。このたび、聖学院大学特別研究制度により、2012年の7月から9月にかけてイギリスへ調査研究に行く機会を得た。そこで、ケンブリッジはじめとする5つのNHSトラストを訪問し、「リカバリー・イノベーション」の最新情報に接するとともに、近年、注目されている「ピアサポートワーカーの役割」に焦点を当て、関係者へのインタビューを試み、その成果をとりまとめ、それらのわが国への応用の意義を考察した。

キーワード； アリゾナモデル、ピアサポートワーカー、フェイス、リカバリー・カレッジ、ヒューマンライブラリー

はじめに

私は、1977年以来、わが国への応用を目的に、「イギリスにおける精神障がい者支援に関する経年的調査研究」を続け、それらの成果をすでに聖学院大学論叢に投稿してきた。

このたび、2012年7月29日から9月9日まで「聖学院大学・特別研究制度」に基づく海外研究派遣の機会をえた。今回は、イギリス各地（ケンブリッジ、ピーターボロ、ノッティンガム、チェルムズフォード、ロンドン＝CNWL、サザンプトンの各NHSトラスト）を訪問し、各種のリカバリー・イノベーション（Recovery Innovation。以下「RI」と略）の最新情報に接するとともに、それらの有力な担い手となりつつある「ピアサポートワーカー（Peer Support Worker—以下「PSWR」と略）」の役割に焦点をしぼり、23人のPSWRから聞き取り調査を行なった。本論は、これらに基づく論考である。なお、本論上の実名掲載については、すべて方々から了承を得ている。

1 イギリスにおける近年のリカバリー・イノベーションの歩み

RIは、1990年代のアメリカからはじまり、2006年以降、それらの成果がイギリスにもたらされた。その先駆地であるケンブリッジやノッティンガムなどのNHSトラストは、特にアメリカ・アリゾナ州モデル^①に着目し、それらの考え方や方法を採用したのである。例えば、ケンブリッジ州では、アリゾナから講師を招請し、「Education Program」を試行した。また、リカバリーカレッジ（Recovery College）は、2011年4月にロンドン（西南&セントジョージ）で、R. Parkins, M. Rinaldiらがはじめ、同年11月にはJ. RepperらがNottinghamで開始し、さらに、LondonのCNWLが続いた。North Essex（ハンプシャー州）およびSouthern Health（ノースエッセクス州）は、2013年開設を目標に準備中である。

2 各地のリカバリー・イノベーションの実際とPSWRの役割

〈ケンブリッジ〉

FACE (Frequent Attenders Care Enhanced)

（説明）SW Emma Green（プロジェクト主任，Ida Darwin Centre Block 14）

（事業の概要）

このプロジェクトは、2011年12月にスタートした重症者支援対策事業で、年間に5回以上の緊急対応を必要とした精神障がい者が対象。主な問題は、多問題、アルコール、薬物依存、ボーダーライン、ホームレス事例。これまで（7ヶ月間）に120人に対応。

トラストの事業方針は「すべてのユーザーにPSWRが対応することと、社会的包摂をめざす」こと。担当：SW 1名（Emma），パートタイムSW 1名，PSWR 2名。Ida Darwin Centreはケンブリッジ（アデンプルック総合病院を含む），ハンチンドン地区を担当。主な連携先：GP，医療機関，消防署（救急車），警察。

（プロジェクトにおけるPSWRの役割と成果）

PSWRが担当するようになってから、ユーザーが安心してサービスを受けようとする（40%に改善が見られる）。1人当たり、18~2400ポンドの経費削減になっている。前よりも質の良い生活ができています。

（PSWRのアプローチの方法）

文書（フォーマットあり）による面談と聞き取り → エビデンスベースの研究と評価（チームワーク） → 支援計画の作成（Implement care plan = 8週間） → 支援および振り返り（3ヶ月ごとにPSWRが担当。生活者としての生活実感を大切に） → 再評価。

Recovery College Project

(説明) プロジェクト主任 (すべて PSWR) : Sheena・Moony, Cath & Tracy

(事業の概要)

2012年1月にスタートした新規プロジェクト。アリゾナのRIのトレーナーを呼んで6か月の講習会を開いた。目標80人を狙ったが、集まったのは60数人であった。内容は、4週間×4コース必修。4日の実習を設けた。第2コースはSheenaとTracyが担当。これがきっかけで、この後、SheenaとTracyはアメリカのアリゾナで研修。Sheenaは実務の中心的存在。現在、カレッジを設立するために、10団体と>Contactしている。その中には、TescoやJohn Lewis社も含まれる。財政支援の面からアプローチしている。8月には、キーパーソン育成のための研修会を開いた。募集の前提としては、誰でもはば広く参加できることを目指した(学生も可能)。また、ケンブリッジ音楽祭時は「ヒューマンライブラリー」を設置(本の代わりに、ユーザーが20分ずつ自分の体験を語るもの)。

(PSWR—Cathの補足説明)

このプロジェクトは、Geoff ShepherdとSharon Gilfileが提案。SharonはImROCK(地方組織改革)の主任で、これもその一環である。全体で6コースの研修科目を用意。ノッティンガムや西南ロンドンNHSとは別に、ケンブリッジでは、はば広い対象者に呼びかけるものにした。この研修会には、国内の有力チェーン店JohnLewisがスポンサーになり、会場と資金提供をしてくれた。研修は、「セラピーからエデュケーション(新たな学びと訓練)へ」をめざし、アリゾナの「エデュケーションプログラム」を応用した。そのねらいは、「ピア・エンプロイメント」「リカバリーエデュケーションセンター」「リカバリー・イノベーションセンター」「カルチャーチェンジ」である。具体的には、精神障がい者としての体験が最大限に尊重され(活かされ)、サービス、生活、人間関係、就労などの面において質の転換が図られることである。

ShDMPM (Shere Decisson Making Psychiatric Medication) プロジェクト

(説明) PSWR Sheena Moony

(事業の概要)

このプロジェクトは、大量投薬問題への挑戦である。2005年にMINDがリサーチを開始。大量服薬とグラクソア社などと医療関係者との癒着が大問題となった。なかなか改善されなかったが、3年前から、ケンブリッジ精神保健ファンデーショントラスト(以下「CPFT」と略)が調査グループを設置。シューラレモン教授(ケンブリッジ・アングリアラスキン大学)が中心になり、精神科医、ケアコーディネーターなどが調査に取り組み提言を続けている。服薬の自己管理や成功例は、パトリアディーガンのそれや、フィンランド(オープンダイアローグ)の例がYouTube(5分)で紹介されている。世界中で統合失調症の投薬量が下がっている。ケンブリッジでの調査の結果、50%の投薬に問題があった。

(PSWRによる就労援助—IPS)

(説明) PSWR Cath

入院患者に対する就労援助(週1回)。プレ就労教育的に、自分のPSWRとしての体験談も交えて働く意味の吟味、いろいろな興味を引きだすための働きかけ、傾聴を大切にしている。IPSモデルによる、ユーザーの要望(目標)に沿った就労援助を目指している。IPSはOTが先鞭をつけた。その意味で彼らは聖なる先駆者(Bible)である!

〈ピーターボロ〉

Peterborough・ST Johns (CPFTのピーターボロ支局・支援拠点)

(説明) (OT/PSWR) Rachel Wakefield, (OT) Annelis & (PSWR) Cath

(事業の概要)

ここは、CPFTのピーターボロ支局である。精神科病院も併設している。ここには3人のOTがいる。トラストは多くのPSWR雇っている。OTが積極的に精神科医と連携し、その人にふさわしい就労について常に議論し知恵を絞っている。バランスのとれた条件づくり(就労とユーザーの趣味やレジャーとの尊重)と、さまざまなプログラムの実施を統括している。

(PSWR Cathが担当している就労援助事例)

フルボーン精神科病院の司法病棟(中等施設)に入院していた男性。40才。6年前まで会社員であったが、心身のバランスを崩し、困窮して窃盗を繰り返し、重犯で裁判所裁定(ダイバージョン)。就労援助にあたっては、まず、2つのボランティア活動で心身を慣らした。その後、本人の希望にそい(IPSモデル)、セインズベリースパーマーケットへ就職した(パートタイマー)。就労前教育では、物言い、アイコンタクトの大切さまで実際にトレーニングした。就労後は、Cathがインターネットや訪問によりフォローしている。生活の質が変わり、みんなに笑顔で対応できている。なお、6年前に、ケンブリッジ中の地域作業所がすべてなくなり、一般就労の道が開かれた。

The Cavell Centre (州立精神科病院)とPSWRの役割について

(説明) (OT) Annelis, Mike Bush 主任 SW 補

(病院の概要)

モーゲージ保険会社がスポンサーになって新しく建てられた精神科病院。入院病床:30(6床-閉鎖=3床は司法対応)、高齢者、精神障がい者対応。入院後3日間セスメント。入院は平均3週間(治療)、退院後3ヶ月ごとにリハビリテーション状況のアセスメントを実施。24時間をカバー。ナース4人、SW3人、SW補1人、精神科医=ハンチンドンと兼務、PSWR1人(PSWRの役割は、初期インタビューと調整。常にユーザーへのチャレンジである。PSWRの態度が反映され、試される。)

(早期介入チームにおけるPSWRの役割)

(説明) PSWR Mark Coldwell

今まで訓練を受けたユーザーは62人いる。PSWRの産みの親はCambridgeの「Karen Bell-前

CPFT 代表。ガンで死去。彼女の夢は CPFT の職員の 40% を PSWR 雇用とすることであった。アメリカへ自ら sheena や Tracy を連れて行って訓練させてくれた。アメリカのリカバリーアプローチの本を読んでインパクトを得たらしい。それまでの、「治療・セラピー」の考えから「フレンドシップ、人生の改善」という考えに転換したアメリカに深く感銘を受けたらしい。今、イギリスは財政危機。ソーシャルサービスから雇用への転換が強く求められている。私はこの病院のアセスメントのユニットに属している。私の役割は、「Early journey」に接触し、寄り添い、地域ベースの治療とリカバリープラン (CPA) を作ることに寄与すること。入院病棟では、2、3 週通って「ダークな (ネガティブな) 表現 (診断も含む)」を全人的 (holistic) に読み解くことと記録することに専念している。Negative から「Positive with respects」へ。精神科病院は変わった。怖いところから「親しみのもてるところ」へ。

(SWR の呼び名について) 私はピアが一番いいと思っている！ Patient は論外だが、「サービスユーザー」というと「ドラッグ」と間違われる。直接。ゆきお！ マイク！ と呼び合うのが一番いい。今は「Time to change」というが、TV も新聞も今でもネガティブ！ でも、家庭で治療が受けられるようになったのがいい。「How are you doing?」って気楽にアプローチできるようになった。

(PSWR の給料) PSWR の給料：公務員給与体系のなかの Band3 を適用。月額約 10 万円 (税金の戻りを含む)。Band4：居住ケアワーカー、Bband5：SW の初任者、6：中堅 SW、7：チームリーダー (Mike)。家庭医 (GP) の待遇は前よりは良くなってきた。病院勤務の精神科医は別格。ローヤルアカデミーに支えられている。

(PSWR の将来)

アメリカのように、自由に大躍進すればいい。コンサルタント精神科医になるピアまでいる。それでも良いのでは！

53 Thorp Road (CPFT・Cameo North=早期介入チームの拠点)

(説明) PSWR Claudia

(事業の概要)

(CBT meeting)～新規ケースの受け入れと担当ケースの再確認。財政問題の報告、雇用問題の報告、Ida Darwin CAMEO との連携調整

(Stuff meeting)～PSWR が司会。コンサルタント精神科医、精神科医、SW、OT、SW、PSW 合計 12 人が出席。次々と担当ケースの近況報告。

(PSWR Claudia のリカバリーの旅)

診断は「統合失調症 (パラノイア)」。時々、幻聴！ 今も服薬中。大学を出て SW として働いたが発病。入退院を繰り返した。その後、アメリカで PSWR のトレーニングを受け (Sheena たちの

後輩), 帰国後, 現職についた。この職場には4人のPSWRがいる。日頃感じることは, 専門家の発言力が大きいこと。(少し圧迫を感じる), ゆっくりユーザーの話を聞きながらサポートすることを心がけている。いろいろな人が「サポートのために」出入りしすぎるのは問題! もっと自然体に!

Cambridge Offender Project (COP)

(説明) SW Carlos Holder

(PSWR が働いているフルボーン病院の概要)

本部: Elizabeth Hall, 入院: 18~65才(司法病棟に79才1人), 6週間, 以後6週間サイクルで入院延長可能。・フレンズ病棟(重症患者), エイドリアン病棟(救急患者), シーダー病棟(一般病棟—16床中3床は司法対応用。特別室(2保護室)があるが未使用。Gマッケンジー病棟(司法病棟)46床。

(COP事業の概要)

このプロジェクトは2008年から, G. shepherdの指導により, パイロット事業を開始。2012年2月1日から正式スタート。司法精神医学の対象者の就労支援を含む処遇改善をめざしている。対象者は, 統合失調症, 重いうつ, アルコールや薬物依存, 人格障害者など。これまでに50人を支援。40人は何らかのコンタクトがあるが, 特に10人は要フォロー。薬物依存者が多く, ヘロインが中心。カナビス, エクスタシー, アンフェタミンも。家を壊して侵入し金銭を盗む(Burgley)で重犯の末に対象になるものが多い。主に警察への初期介入。居住支援, 就労支援。現在はケンブリッジとハンチンドン地区が対象だが, 今後, ピーターボロ地区にも拡大予定。家族は犠牲者。家族に対する身近なサポートネットワークはない。生活苦や未就学者が多い。

(COPとPSWRの役割)

(説明) PSWR James

支援チームにおけるPSWRの役割は, 初期介入=ニーズ調査とリカバリー計画(12ヶ月間)作成, 様々なサービスの活用, コミュニティクライシスチームとの連携, 家庭訪問とフォローなど。リカバリーオープンミーティング(毎週火曜日, 入院者とのミーティング。生活, レジャー, スポーツなどの楽しさの共有。Best strengthの発見)。これまでに16人のユーザーに関わっている。定期的には「星型評価表」による自己評価を担当。また, いろいろな交わり。エスコートも仕事。ユーザーとテム川のパント(平底舟)のアルバイトをしたことも。その時は8ポンドもらった。仕事はまるでパズルを解くみたいに複雑で面白い。

(Jamesさんのリカバリーの旅)

8才時, 性的虐待。ウエルズ大学2年時, 突然, 発作的に激しい怒り! 不安, 人間不信に陥る。大学卒業後SWとして就職。入退院を繰り返した。2010年8月にピアサポート研修会を受け, PSWRに採用。現在もクロザピンを服薬。自己コントロールはうまくいっている。いまは, 考え方としては, いつもポジティブに! 気づきと生き直しをころがけること。生きてもっと前に進む! わたしのストレンクスは「ラグビー」が大好きだったこと。

(入院病棟と PSWR の役割)

毎週、入院患者に対し、PSWR として「星型評価表」による自己評価を実施。なんでも入院患者にとって必要なことはやっている。給料は月に 600 ポンド (約 8 万円) プラス 400 ポンド (約 5 万円) の「Working TaxCredit (障害還付金)」。

(Paul さんのリカバリーの旅)

Oxford 大学在学中に発病。化学を専攻していた。18 才、21 才時に自殺未遂。うつ病とパーソナリティディスオーダーの診断が出ていた。その後、服薬とカウンセリングを受けていたが 3 年前にも自殺未遂。アルコール依存が激しくなってきた。しかし、AA に出席し「12 のステップ」によりリカバリーできた。その後、Sheena のサポートを受けながら、「リカバリー・イノベーション」の PSWR 養成コースを終了。給料が安く、レジャーに回す余裕はない。しかし、CPFT に PSWR として雇われ、生きがいのある生活をしている。今の気持ちは「Happy & Content (満足)」。

〈ノッティンガム〉

Nottingham Recovery College Duncan McMillan House

(説明) Nottingham 大学教授・PSWR Julie Repper Trever

(PSWR が働いている事業の概要)

- ・2011 年 5 月にオープン。はじめは市内の小さな借家から開始。2 人のマネジャーと 3 人の事務職で開始。20 コースを設定 (1 コース 3 日)。
- ・現在は、旧アサイラム (巨大収容型病院) の 1 階に専用スペースを確保。スタッフルーム 2、クラスルーム 4 (天井を高くし自然光を入れ、受講生に圧迫がないように配慮)、図書館 (Human Library ユーザーの体験を @ 20 分から 120 分聴取できる。あまり蔵書はおかない。PC3 台設置)。
- ・現在のスタッフは、教員チーム (40 人、Partnership=大学教員、住民、ユーザーなど)。職員 (Learning support adviser: フル 2 人、パート 1 人、ボランティア 3 人)、14 人のピアトレーナー。
- ・95 コースを運営。内容は多様で、2 時間から 1 週間に及ぶものもある。専門知識とピア体験に基づくものの 2 つに大別される。建前は、誰にでもオープン。本人、友人、隣人に。
- ・運営: 責任者は NHS 代表。Julie Repper が現場主任。授業は火、水、木の 2 時~4 時+アルファ。6 週間。原則 1 クラス 14 人の受講生。

(カレッジへの入学手続きや授業上の要点の説明)

(説明) PSWR Helen Daisy

- ・Helen さんの役割は、受講生のラーニングプラン作り。
- ・いろいろは広報誌や NHS の窓口パンフレットを置いている。すべて応募は、電話予約。
- ・基本は「College」であり、「Student Union」にも加盟している。
- ・学生は 3~4 ヶ月間、真面目に学んでいる。受講生の状況によっては、軽度、短期的なトライアルも実施している。みな学びながら、より自己コントロールやサポート能力を向上させていく。

・基本的には、初回面接時に次の2つのシートを使いアセスメントしていく（話し合いで書き込んでいく）。

シート1：Individual Learning Plan

ライトピンクやクリーム色のペーパーを使用。識字障がい者に考慮している。

「I want, , ,」の項目は、「病気をコントロールしたい」とか、強気の考え（Strongidea）を好む傾向が見られる。話し合いをしながら、かれらの「Strength（能力、職歴、学歴、生活歴、アスピレーションなど）」を一緒にさがす。常にポジティブ思考。

シート2：Student Enrolement Form

・学生の個人的な名簿のようなもの。次の段階のジャッジや受講決定は、Julie Repperさんと上部は判断。修了書も発行する。ただし、修了生が全部、PSWRとして働いているわけではないが、「Challenger」としての達成感を得ている様子である。

ノッティンガム州立病院と早期介入チーム

（説明）PSWR Travy

（PSWRが働いている州立精神科病院の概要）

3病棟 25床（5床は救急用）初期介入支援と地域訪問支援も行う（専門チーム＝MHT）とは別行動）

（PSWRの役割）

現在は主に危機介入病棟に勤務。ここでは週8時間働いている。また、定期的な「星型評価」「ブックレットの作成」などにあたっている。とにかく傾聴に徹している（Active listening Programに基づく）。給料は約10万円。プラスTax Credit78%還元。

（Travyさんのリカバリーの旅）

2001年発病。元、日系のNSK 商社マン。ノッティンガムからロンドンまで列車通勤。働きすぎて身体を壊した。診断はうつ病で、入退院を繰り返し、電気ショック（ECT）療法を何度も受けた。また、BCTのサポートも継続的に受けた。

2004年、「アクションプラン」に参加。2006年からリカバリーカレッジ事業に参加。はじめはボランティア。しかし、それから3年間、不安症、気分障害、統合失調症の診断までついて、悪戦苦闘。2011年6月から、薬が適合し状態安定。進められて「トレーナーコース」に4ヶ月参加。

（早期介入チームの主任PSWR、Neville Woodさんのリカバリーの旅）

20年間、日本の電気メーカーチェーンストア（電気製品販売）で働く。結婚、2人の子供がいる。働きすぎ。片道4時間の列車通勤で体のバランスが崩れた。不安感、電話応対ができなくなる。仕事のパワーが落ち込んだ。自己受診。診断：うつ病。自殺未遂2回。家族が気づいて入院させた（3ヶ月）。自己コントロールができなかったが、オランザピン服用で安定。ケアコーディネーター（ケアマネ）のSWがユーザーインボルブセンターとコンタクトをとってくれるなど、「Holistic（全人的）」

に面倒を見てくれた。それでも自信喪失状態が続いたが、PSWRによる丁寧なインタビューを受け、他の人達とコミュニケーションがとれるようになり、真っ暗な中から抜け出すことができた。状態が安定後、経験を活かしてNPO立ち上げに参加した。さらに、ピアサポートトレーニングを16コース受講した(当時はリカバリーカレッジはなかった)。リカバリープリンシプルである「NegativeからPositiveへ」「Language(わかりやすい表現と真の会話)」などに共感。その後、自分の経験を活かして「Intensive Acute Unit」のPSWRになった。現在、Nottingham NFTには、12人のPSWRが雇用されている。そのうち2人はケアラーサポート。2人は地域訪問を担当している。

(家族(母親) PSWRのCleoさんのリカバリーの旅)

息子は「統合失調症」。幻聴が聞こえ、家族は一時どん底だった。イギリスは「夢の国」ではない。親は大変。しかし、自分がリカバリーカレッジに入り、PSWRになるといろいろなことがわかって、日常生活に応用できた。例えば、「怒りは症状ではない。怒りたければ怒れば良い。何かわけがあるんだ」と思えるようになった。息子はいま、社会サービスを受けながらアパートで暮らしている。ガールフレンドができて、暖かいまなざしになった。息子のおかげでPSWRになれた。「Social Inclusion」を実感している。他の人達が外に連れ出してくれる。先日はハンティング(射撃)に連れ出してくれた。体験的には90%のユーザーはあたりまえに外に出られる。

(ケアラーサポートワーカー・PSWRとしてのJudith Machinsさんの役割)

21歳の息子を抱える家族PSWRである。Cleoさんの良きパートナー。これまでに、Rethink, Mind, Framework(housing), Recovery Forumなどに参加。主な役割は、リカバリートレーナー(受け入れ面接担当)。「you can this. . . . positive, strength」を意識する。面接は「cooping」でもある。語って元気になる。常に理解しやすい語りかけ(Language)を大切に、自分のストーリーを語ってもらう。ユーザーだけでなくケアラーも長く放置されていた。リカバリーカレッジは独立事業であるが、Partnership working。ユーザーとケアラーとプロフェッショナルのトライアングル事業。2年前から家族会をつくった。家庭訪問をして主に妻や母親を支えている。この事業には、現在ボランティアも含め16人が関わっている。私は主にパーソナリティディスオーダー事例に関わっている。

パーソナリティディスオーダー支援イギリスでは比較的新しい分野なので受け入れられやすい。

(薬物依存症を克服したPSWR-Sean(シヨーン)のリカバリーの旅)

自分はほかの人とはちがう。子供の施設のSWを6年やっていた。しかし、ストレスに負けて、「Peace」が欲しいために、カナビス、コカイン、ヘロインに手を出した。どん底を経験し、NA(ナルコレプシーアノニマス)に自ら助けを求めた。12のステップに救われた。医学モデルは解決にならない。自分でもよく解決できたと思う。毎週、1回、12~3人のメンバとNA例会をもっている。NAは、1984年にアメリカからイギリスにもたらされた。この地域では、今までにNAを手掛かり

に60人がリカバリーした。幻聴には必ずその人にとっての意味がある。常に、「やるべき」ではなく「やったらどうか」と助言し提案している。でも、自分は24年間依存症に苦しんで、4年間、完全にやめられているので、どう対処したらいいかということはアドバイスできる。その意味では、ほかにはないパイオニアである。誰でも、その気になればPSWRになれるけど。

Nottingham Involve Centre

(説明) SW Jonathen Wrigt (センター長)

デイケアではない新しい活動空間。原則的には、全国的に、重症の精神病患者や蝕法精神障がい者 (Offender) のためのデイケアは存在する。・ユーザーはいろいろなことを隠して孤独に生きてきた。ここでは、それが言えたり、互いにインボルブしあうことができる。例えば、幻聴を少しづつ語っていく。他のメンバーと会話をする。そういうことにチャレンジして、だんだん、幻聴になれたり、プレゼンテーション能力を向上させたり、他人を信用できるようになり、生活スキルも向上する。根本的に「カルチャーチェンジ (生活上の価値観や生き方を変えること)」の場である。精神障がい者の雇用者が6ヶ月ごとに研修に来る場でもある。毎週木曜日に、PSWRがファシリテーターになり、ミーティングを開いている。総数30~40人が利用している。自然に、黒人G、痴呆症G、アジア人G、インド人G、趣味や気の合う人たちのGなど、いろいろなサブグループに分かれる。お茶や昼食も一緒に食べたりする。また、地域で生きていくためのスキルや生活情報の交換、服薬やクリニカルな自己管理法についても学ぶ場になっている。また、Human Library (人間図書館)も設けている。これは3年前から。本の代わりにユーザーが体験を伝えるもの。原則@20分。しかし、2~3時間になることもある。最近、リカバリーカレッジの中に専用のスペースも設けた。これらの結果は、所長が、3ヶ月ごとに資料化し、「Your Feedback」やWebsiteに載せて広く伝える努力をしている。NHS本部にも報告している。

<ノースエセックス (チェルムズフォード)>

(説明) North Essex のIPS 主任 Raza Ahmed

(ノースエセックス州の概要)

・人口:100万人。3地区をトラスト本部とチェルムズフォード支局でカバー。CTは15チーム。IPSプロジェクトは、RazaAhemd, Amand=雇用担当SW, Tine=OT, Graham=雇用主任で担当。チェルムズフォードとコルチェスターに事務所を置いている。この地域では、4人に1人は精神障害者。90%のユーザーは働いていない。しかし、就労は自信や生活の楽しみを取り戻させるので、やりたい仕事(アスピレーション)を重視することが大切。

(イプスウィッチの出先事務所でのIPS聞き取り)

21才の女性:シングルマザー(4才の息子がいる)。地方大学を中退。GPのすすめで働き始めたが、うまくいかなかった。掃除婦だった。本当はもっと自分にふさわしい仕事をしたかった。IPSプロジェクトと出会い、IT技術を活かして大手スーパーマーケットに就職。今はボーイフレンドもで

きて安定。

トムさんのリカバリーの旅：13年間入退院をくりかえした。5年前は自殺未遂。大学在学中に発病（うつ病）。建築士に成りたかった。IPS プロジェクトと出会い、現在、建築士の資格取得に向けて、専門学校で勉強中。状態は極めて安定している。

ロバートさんのリカバリーの旅：双極性精神障がいで入退院を繰り返す。

多額の社会サービスに依存。もともと、自転車やバイクが好きだったので、その道に進みたかった。IPS プロジェクトと出会い、チェスターでの農業、郵便の仕分け、メッセージボーイ、図書館勤務などをしながら、「したい仕事」をさがした。その結果、リサイクルショップに就職。最近、貯金がたまったので念願のカーボン製の軽量自転車（新車）を購入することができた。自己管理は極めて順調。

リンさんのリカバリーの旅：40才の女性。20年間パートタイムの仕事をしていたが6年前に「幻聴」。自信喪失。この地域は夏は海水浴客でにぎわい仕事があるが、年々仕事が減り、6年前の冬は最悪だった。劇場の掃除婦や切符もぎりの仕事、さらには、NPOの事務などをしてしのいだ。その後、失業保険でつないだがパートの仕事しかなく、絶望し自殺企図。現在、大手のスーパーマーケットでITの技術を活かして再就職すべく、IPSプロジェクトの教育支援（パソコン研修）を受けている。

〈ロンドン・CNWL〉

London CNWL（中央北西ロンドン NHS トラスト）

（説明）（SW）Lynne Miller Latimer House（Great Portland Street）

（CNWL 特別区と事業の概況）

・精神保健関係は5地区（Borough）を担当。Westminster から北西ロンドンをカバーする。依存症対策は6地区をカバー。管内に蝕法施設も複数あるためこれもカバー。

・PSWR の雇用率は4～5%（6000人中300人ぐらい）。

・IPS は、「Employment Specialist」を配置して試行中。OT も一定程度いるが、職歴を重視し必ずしも専門家ではない。対象者は75%が精神障がい者でほとんど入院歴のある人。パイロットとかデザイナー志望の人も出てきているが、なかなか希望には添えない。時間が必要（Taking Time!）

・Lynne Miller は全体を統括するスーパーバイザー：9年間、オーストラリアで働き帰国してみたが、イギリスの状況は「まだこんなに遅れているのか」とフラストレーションを感じるほどだった。そこで、改革にのりだした。

（CNWL における PSWR の役割）

（説明）PSWR Debbie Cane

常設の College でのスタッフトレーニング。および、PSWR 雇用に従事（依存症病棟および早期介入チームに2人、病院の救急チームに2人、デイケアに2人雇用）。OT のスキルと体験をうまく

活用したい。PSWR はどんどん専門資格を取り、自己実現してもらいたいと思う。PSWR というネーミングについては、「Support Worker」という人が結構いる。ドラッグユーザーと間違われることが多いため。30年前は、PSWR などは考えられなかった。10年前でも、「私は治療共同体にいました」などといえなかった。イギリスには依然として偏見が存在する。精神保健改革は20年前にスタート。1980年代はまだ「アサイラム（巨大収容）」の時代だったが、今は大幅に病床削減。ほとんどない。これからはもっとオープンになれると思う。Time To Change! アメリカやニュージーランドが先行しており、イギリスはその後追い。アメリカの精神保健担当者は80%がPSWR といわれている。しかし、そういう所は実際には2~3か所しかないのではないかと思う。イギリスの経済状況（Economic Climate）は良くない。そのため、経費削減やマーケット志向が求められている。大学の学費が昨年40%引き上げられ大問題になった。無職、ドラッグ問題が特に若者を苦しめている。いろいろ知恵を出さなければいけないが、それでも、ソーシャルサービスは維持されているといい。でも、GPも優遇されだしたのに、月に90人の診察で成り立っていたりして、まだまだバランスは悪い。病院の勤務医やコンサルタント精神科医は特別に優遇されている。王立アカデミーがバックについているからしかたないが。さらに、ケンブリッジやノッティンガムのPSRWのトレーニングにはひとりあたり、月「1000ポンド（約135000円）」かかっている。そこで、CNWL独自のプログラムを工夫した。

（デビーさんのリカバリーの旅）

うつ病で20年の闘病生活を余儀なくされている。入院歴もある。通院は2週間おき。10年前まではOTとして働いていたが、CNWLのRecovery College PSRW養成コースを経て雇用された。2ヶ月前からフル稼働。

CNWL Recovery College

（説明） Recovery Trainer SW Amanda Bailey & PSWR Waldo Roag
Stephenson House (CNWL NHS Trust Head Quarter)

（事業の概要）

・このプロジェクトは、2011にRachel Perkinsが設立した。カレッジは、CNWL本部1、2階部分にクラスルームといっしょに常設されている。プログラムはアメリカやNottinghamの先行例を参考に、議論を重ね、短期と長期のコース、ユーザーと専門職を組み合わせるなど独自の工夫をした。担当者はAmanda (SW) はじめ専門職5人、WaldoらPSWR2人、事務職3人の合計10人で構成されている。特にAmandaとWaldoはRecovery Trainerという名の専門職である。この職種は3年前からおかれている。

（Waldo Roagさんのリカバリーの旅）

（CNWL 広報資料 [Road to Recovery] より）

これまで、30年間精神保健サービスを受けてきた。10代にドラッグを始め、急激に重い依存症に

なった。私は若手の映画会社の監督としてとてもうまくいっていた。しかし、稼いだ給料はみんなドラッグになって消えていった。そのために働いているようなものだった。数年後、人生は破綻し家も家族も職歴も失い、破産者となった。私はあらゆるものを失ったが、もっとも痛感したことは、自分を失くしたということだった。勇気を出してホステルに助けをを求めるまで、2年間路上生活者だった。やがて、事柄はゆっくり良い方向に動きだし、家に住まい、ドラッグ使用はやめた。しかし、日々のストレスや緊張とうまく向きあえなかった(not coping)。私は、最終的に、精神保健サービスを受けることとサポートグループに入る勇気を絞り出した。これらにより、自分が考えていたよりももっと、自分の人生を自己コントロール出来ることを自覚した。グループが終了したとき、私は、ユーザーを雇用する組織で働けないかと尋ねた。私は仕事に戻ることにについては、必然的に茫然自失の状態だった、しかし、私はどこかで働かなければならないと思える状態にまでたどりついたのである。私は、週に半日の園芸の仕事をはじめた。それにより、私はグループのメンバーとして遇されていると感じることができた。これは私の夜明けであった。人として遇され信用され、チームのために何が出来るか期待されるということである。私はCNWLのリカバリーカレッジに包み込まれた(Inclusion)。その後、私はカレッジの「Peer Recovery Trainer」として雇われ、以来、こんなに自分の未来に向けて発奮したことはない。私にとって、ともに創り出してく環境で、その様な方法で働くチャンスを得たことは、私のリカバリーの旅を歩む上で大きなものとなっている。それは、私の仲間(peer)にとっても、参加者にとっても同じことだと信じている。私は過ぎ去った生き様を恥ずかしいとは思わない。そして、今成し遂げていることを誇りに思っている。

Social Involvement コースの実際

- ・trainer は2人 (Amanda, Waldo)
- ・受講生は15人 (ユーザー6人, 残りはSW, OT, 看護職などの Supporters)
- ・教室は2階。4つのテーブルに4~5名程度に分散。

(自己紹介)~参加の理由

SW：自分のリフレッシュのために参加した。

User：involve の意義について学びたい。

Nurse：入院病棟で働いている。Recovery の可能性について再認識したい。

Community nurse (男)：どのようにユーザーの生活を改善できるのか。Recovery の視点やスキルについて学びたい。

User：self coop の仕方について学びたい。

(授業の様子)

教科書(加除式ファイル)にそって、スクリーンに内容が映し出され、Amandaさんが読み上げで短く解説。Waldo参加、早口に、情熱的に事例を混じえた解説を加える。はじめ、受講生は黙っ

て聞いていたが、どんどん面白いように発言。診断的には、双極性精神障がい、うつ病、薬物依存、パーソナリティディスオーダーなど多彩。

(Ground Role of Recovery?—リカバリーの基礎は何?)

キーワード: Respect, Confidentiality, Mobile in Silent, Share, Experiencet, Time keeping, Active Listening, Refinding of Strength

(課題学習=exercise)

Feeling: 人々は私をどう扱ったか (How people treated me)

どう切り抜けて元気になるか (Surviving & Thriving)

ユーザーは何故希望を失い、力をなくすか (hopeless Powerless)

タイムリーな気づきがないこと、電話対応の欠如、・スタッフトレーニングのいい加減さ、多すぎる書類作成作業 (その分、ユーザー対応がおろそかになっている)、エンパワーメントや自己決定への配慮のなさ、人権擁護の足りなさ、貧しい環境

現状の再チェック

若い時期は心身が変化しやすいのに、医者はすぐに診断を求める、なぜホリスティックにみれないのだろうか? 診断名がくるくる変わる。インターネット (Text) で片付けたがるユーザーが増えている。Text だけではわからない。

たった10分の間診で投薬の内容が変わる。

肯定的な言い換え (リフレーミング) の練習

宿題: P. Deegan の小論文を読んで感想を書いてくること。

〈サウザーンヘルス (ハンプシャー & サザンプトン)〉

(州と事業の概況)

(説明) 所長 Anna Lewis & PSWR Lesley Herbert

・人口: 200万人 (Hampshire & Southamptin), 財政規模: 6億ポンド (1.4ポンドは精神保健), スタッフ: 500人。

・歩み: 20年前は入院主義 (Asylum) の時代。1990年—Community Care Act, 1999年—National Frame Work (Primary Care, User, GPの新しい役割が重要という認識に至る), 2012年度 (10%予算カット—地方が独自にどうやるか—Productive (産業的) な要素を取り入れる—ただし、質、厚み、コストのバランスに配慮することとする)

(具体的なリカバリー・イノベーション改革)

・精神科病院を6から4か所に統合 (165から105床に削減~1970年代は2000床!)

・組織大改革: 5つのコミュニティチーム (In-Patient Service, Assetive Outreach, Crisis Research & Home Teratment, Early Intervention Psychosis など) を、3つに統合。→ (In-Patient Service, Acute Care, Community Treatment Team)

・オランダモデルを採用—Hampshire は広大なので独自の工夫をする必要があった。アメリカモデルは地域格差が大きすぎるので不採用、オーストラリアやニュージーランドはうまくいっている—エビデンス活用。

(Southern Health における ImROCK)

(説明) PSWR Lesley Herbert

サービスユーザーとともに、価値のある組織改革をすること。その際の PSWR に期待される役割は、Cosumer Adviser, User Network, Partnership with Professional, Peer Work (Wellness-Recovery Active Plan), Recovery College-PSWR, IPS-Hampshire は2年前から盛ん) など。

(3人のPSWRのリカバリーの旅)

(Sophie Shuneu-ソフィーシュノー)

大学1年の時に「Eating disorder」になった。CATを受け回復。リカバリーを目指し、大学を卒業し、その後、NHSの求人(心理職)に応募し入職した。クリスマスの時だった。専門の仕事を持ち、次第に自信をとりもどし、プライドをもって過ごせるようになった。また、人前で自分の体験を話せるようになった。今は、ケアコーディネーター、また、心理職としてグループセラピーやDBTなどに関わっている。最近できた「ForumTheatre」(障がい者による演劇や演劇仕立てのリカバリーの旅の話=パフォーマンス)にも関わっている。資料をして手製の「ActionPlan」を持参。

(Mike James)

19歳の時にうつ病。恐怖症や幻覚に襲われ、何度も自殺企図。入院してやり直し。

ある日、目が覚めると希望が湧いてきた。大学を卒業し、今はNHSの「Service User Involvement」の仕事をして4ヶ月続けている。具体的には、インタビューによる「セルフケア能力の改善」のためのアドバイスなどを行っている。できるだけ感情を受け入れている。いろいろな体験の違いがあり、年配の人には経験を尊重するよう配慮している。

(Paul Valentine)

幼い頃性的虐待を受けた。双極性精神障がいになったが、「サマリタンの館」の世話になった。長く疎外されゾンビのような状態だったが、全人的な支援を受け回復した。大事にしている視点(病気になるのは—Why? What? Where? How? これから目指すPSWRとは何か?)ユーザーの事情はひとりひとり違う。医学モデルは診断基準によってみんな同じように扱いがち。人は同じではない! このことを今後も大切にしていきたい。

3 まとめ

2008年度当初、ピアサポーター(当時はユーザーインボルブメント)は、主にサービスモニター調査などの面で当事者性を発揮するにとどまっていた。しかし、今日のイギリスにおけるピアサポート・ワーカーの役割は多様となり、その規模も拡大して。例えば、①体験をベースにした身

近な相談支援, 特に早期介入支援チーム要員としての活躍, ②リカバリーカレッジの企画・運営・教育担当としての活躍, ③ヒューマンライブラリーなどを通しての体験情報の提供(効果的な住民教育と専門職教育), ④公的な地方組織の再編(ImROCK)におけるコラボレーション。即ち, サービス計画者・提供者(プロバイダー)としての公的な機関職員の意識改革と施策の充実に向けた取り組みなども注目される。さらに, ケンブリッジでは犯罪者の生きなおしのための「Offender Project」において, IPSにもとづく就労援助を実施し新たな成果が生まれている。ノッティンガムでは, 家族ピアサポートワーカーも活動しており, リカバリー・カレッジエリアに「ピアサポートワーカー室」が設置されている。また, ケンブリッジでは「ピアサポートワーカー」というパンフレットが常備されている。

現地の関係者は異口同音に「まだチャレンジ(挑戦)である」という。確かに, 課題として次のようなことが見て取れる。①リカバリー理念のさらなる共有—特に医療関係者や行政担当者とのさらなる協働の必要性, ②全国規模での各地のリカバリープロジェクトの経験交流とレベルアップ, ③民間投資などをさらに視野に入れた財政的基盤の安定。④PSWR雇用の明確化(制度化)と給与・福利厚生面の拡充(現状では, PSWRは, 高学歴者または保健福祉系専門職歴を有する者(主に気分障害圏)が大半である), ⑤国際交流と共同研究の推進などである。

今回の調査研究を通して学んだことは, PSWRの可能性や役割を含む, 様々なイノベーション・プロジェクト・プログラムだけではない。苦節の末にたどり着いた彼らの「リカバリー哲学—相互的人格主義の意義」である。「人間を愛し尊重する」という相互的人格主義の共有とその実効化において, 日本は, 長い間, イギリス人とは別な生き方や価値観のなかに踏みとどまっているといわざるを得ない。大震災の被災地に人間を置き去りにし, 最長50年余も精神科病院に「人間」を収容し続ける日本! 改めて, C.ラップの次のような言葉が脳裏をかすめる。「問題よりも可能性を, 矯正ではなく選択を, 病気よりもむしろ健康を見るようにする。それらを見ることができれば, 成果が得られよう。我々が欠陥というぬかるみにはまっている限り, 成果を得ることはできない。われわれが欠陥に焦点をあてた『暗黙の了解』という束縛を脱しない限り, 効果的な援助はできないであろう。リカバリーの物語は, この転機によってのみ力強く語るようになる」⁽²⁾「真に人間を愛し尊敬すること」に本質的に価値を置かない人や社会, そして, それらに鈍感なうちは, 真のリカバリー・イノベーション, 真の幸福はこの国にはおとずれない。今後の日本においては, 福祉実践や教育を通して, それらを問い続け, それらを育む土壌をさらに耕すことに力を入れなければならない。

終わりに, 今回も親しくご指導くださったG Shepherd博士夫妻はじめ多くの方々に, 改めて厚くお礼申し上げる次第である。

注

- (1) P. 37～；アリゾナモデルは、アメリカにおけるピアサポートワーカー養成プログラムの一つで、次の資料に紹介されている。Jason Katz, Mark Salzer Ph. D 著：ピアスペシャリスト・トレーニング・プログラム（Certified Peer Specialist Training Program Description・University of Pennsylvania Collaboration Community Integration/2006）
- (2) P. 59～；チャールズ・A・ラップ, リチャード・J・ゴスチャー著；田中秀樹監訳：ストレンクスモデル：精神障害者のためのケースマネジメント [第2版] 金剛出版 2008年

参考文献

- ・ Jason Katz, Mark Salzer Ph. D: Certified Peer Specialist Training Program Description・University of Pennsylvania Collaboration Community Integration/2006
- ・ チャールズ・A・ラップ, R・J・ゴスチャー著；田中秀樹監訳：ストレンクスモデル：精神障害者のためのケースマネジメント [第2版] 金剛出版 2008年
- ・ R. Becker, Sara Swanson, G. R. Bond, M. R. Merrens: Evidence based Supported Employment Fidelity Review Manual/Dartmouth Psychiatric Research center/2008
- ・ Recovery for All-Hope Agency and Opportunity in Psychiatry/South West London and St Georges Mental health NHS Trust/2010
- ・ Refocus on Recovery/conference/rethink/Kings College London/2010
- ・ Frequent Attenders/Chronically Excluded Team (FACE) Operational Guidelines/Cambridge and Peterborough NHS Foundation Trust/2012
(Cambridge NHS Foundation Trust 関係資料)
- ・ Literature Review- Frequent Attenders/Care Enhanced Team・2012
- ・ Face Team Evaluation Form
- ・ Face Referral Form
- ・ Star and Plan
- ・ Ault Mental Health Service/FACE Team
(Nottinghamshire Healthcare NHS Trust 関係資料)
- ・ Trust Involvement Strategy March 2010
- ・ Growth Through Partnership/Annual Report 2011/12
- ・ Growth Through Partnership/Involvement Report 2011/12
- ・ Nottingham Recovery College Summer Term Courses 2012
- ・ Positive -Positive about integrated healthcare 2012
- ・ Positive -Involvement -Changing Lives Services and Culture 2012
- ・ Positive -interesting of borrowing a book, borrow a person in the Human Library 2012
(North Essex Partnership NHS Foundation Trust 関係資料)
- ・ Annual Plan 2012-13 A brief summary/2012
- ・ Delivering Outstanding Care Transforming Live/Strategy for 2011-2015 A summary
(Central and North West London NHS Foundation Trust=CNWL 関係資料)
- ・ CNWL Recovery College Operational Policy/2012
- ・ CNWL Recovery College Summer term/2012
- ・ Supported Employment Fidelity Scale/2012
- ・ Health and Wellbeing Pack-Written and developed CNWL service users
- ・ Recovery Stories/EN Social Fund/2011

Study of Comprehensive Support for Service Users
with Mental Illness in Cambridgeshire in The United Kingdom
of Great Britain in 2012

— Recovery Innovation and Peer Support Workers —

Yukio SUKEGAWA

Abstract

This article concerns current research focused on formal as well as informal support of service users with mental illness based on Recovery Theory and Practice in Cambridgeshire in The United Kingdom of Great Britain in 2012. The main focus is on the role of Peer Support Workers who are concerned with individual support work connected with ImROCK, Recovery College, Human Library, IPS, in the UK.

Key words; Arizona Model, Peer Support Worker, FACE, Recovery College, Human Library